

会地区本部と実質的に一体で、依然として奉賛会が頒布に関与していた。大正一三年には神部署支署を二八から一四に縮小。同一五年、全国神職会が設立され、昭和二年より全国頒布を担うようになり、昭和一六年には、大日本神祇会と改称され、昭和二〇年まで続けられた。

このような近代における神宮制度の改革のなかで、御師制度は廃止されながらも、旧檀家との関係を持ち続けた家があった。元神宮の大物忌父で権禰宜であった御師岩井田家である。岩井田家は、明治に入ってから神宮神職として同二八年まで勤めたが、その間も旧檀家との関わりを続けながら、地方の伊勢信仰継続のための支援をおこなってきた。その一つは、各地で従来の伊勢講が再組織化される際の伊勢での受け皿、周旋人としての役を引き受けて、その依頼によって神宮大麻ではなく、両宮神楽殿で授与される大麻を地域へ送り続けてきた。また、旧檀家の参宮者を伊勢で受け入れ、案内宿泊などの支援を行いつづけた。その他に、地域からの特殊祈禱の神楽殿への取り次ぎ、さまざまな講社の動き、教会的な問い合わせなど、神宮神職ならではの情報をもとにサポートを行っている実態があった。また、旧檀家との関わりについては、従来から地域と関わりのある一部手代がそのまま廻りなどの業務を継続したことが資料から分かり、岩井田家の伊勢講の関わりが後々まで継続された理由と考えられる。

以上のような経緯はありながらも岩井田家の資料には、社頭での授与大麻の価格改定、数量制限などの強化、また地域からは神宮大麻と授与大麻の違いについての問い合わせや、伊勢講

の廃止通知などが記録され、神宮大麻の全国頒布の体勢確立される経過のなかで、旧御師のたどった役割の変化を知ることができる。

藤樹と蕃山の経典(大学・孝経) 解釈の違いについて

鈴木 保實

藤樹(一六〇八―四八)と蕃山(一六一九―九一)の経典(大学と孝経)についての解釈の違いをみる。二人の出会いが岡田氏本藤樹年譜によれば寛永十八年冬(一六四一)、藤樹三十四歳蕃山二十三歳の時である。翌年四月まで、蕃山は業を受けた。(資料として、藤樹は「藤樹全集二」所収の大学蒙註・大学解・大学考・孝経啓蒙(岡田氏本)、蕃山は「蕃山全集三」所収の大学小解・孝経小解を使用。)

大学は藤樹が聖人への道を歩むことを決意させた書である。藤樹の思索は年とともに深化発展している。晩年期の藤樹と藤樹中年期入門の蕃山との違いは三綱領八條目の解釈にある。藤樹は明德・親民・至善を同体異名(大学蒙註、全二、二二頁。大学解、全二、二六頁)とし、「三綱本一綱、唯明德ヲ明ニスルニ極レリ。」(大学考、全二、一三頁)としている。蕃山は「至善は無極の理也。…止至善は明々徳親民の工夫の主宰也。」(大学小解、全二、一八三頁)とし、至善に止まることは明德を明らかにし民を親しむことの工夫の主宰であるとし、定靜安慮得は知止の後の日新盛徳の階級としている。この考えは藤樹と異なる。

八條目については、藤樹は「八條各別ノ見ヲ立テ講ズルコト

ナカレ。格物ハ脩身・正心・誠意・致知ノ功ヲ包括セリ。」(大学解、全二、三四頁)と述べ、工夫に八條の等級があるとは認めず、一時一事の工夫の中に他の七事が包まれるとして「八條總括ノ工程唯格物ナルコト」(大学解、全二、三六頁)を説く。更に「八目ノ工程誠意ヲ主トス。而シテ意ヲ誠ニスル工程、即チ致知格物也」(大学考、全二、一三頁)、「意ハ萬欲百惡ノ淵源ナリ。…凡心ノ起發有善有惡ハ本心之裏面ニ意ノ伏藏アル故也。然レバ則ハチ惡念ハ意ノ伏藏ヨリ起發シテ本心ノ發見ニアラズ。」(大学考、全二、一四・五頁)と言つて、意が万欲百惡の淵源で、惡念は本心の裏面に伏藏している意から起發するとしている。

この「意」を「誠」にするためにはどうしたらよいのか。「格物致知ハ誠意ノ眼目」(大学考、全二、一六頁)「格致ノ外ニ更ニ誠意ノ工夫ナシ」(大学解、全二、四二頁)と言つて、「格物」の「物」を「五事」とし、「致知」を「良知に致る」と解して、「貌言視聽思の五事」を正すことにより吾が「本體の良知」を顕現させれば、「意」は「誠」になり、それは「明明徳」の状態だといふのである。蕃山は「物」を「コト」と読ませ、「意を誠にせんと欲する者は其知の本然の明をみがき出さんとす。天下の物事、五倫より尊きはなく、五事より要なるはなし」、「五事におゐて非心を格し非禮を戒むるを格物と云り。」と述べ、五事を正すのではなく五事において非心を正せとする。「心事元是一也」(岡田氏本年譜三十七歳)以前の「支離ノ病ヲ免レ」ざる状態ではないか。蕃山は「意は不常往來の念なり。無事の時は間慮となり、有事の時は雜慮となる。」と考え、

本心の裏面に意が伏藏するとはしない。

周知の如く藤樹の孝經テキストは「今文孝經」「古文孝經」等にも従わず、全篇を今文の十八章、古文の二十二章の章次を捨て、四つの問答体にした独自のテキストである。蕃山の「孝經小解」は藤樹の「孝經啓蒙」の本文を採用していることから、基本は師説によつてゐる事がわかる。「孝無終始」の解を蕃山は、「愛敬の心滅びたる義也。」としてゐる。「孝在混沌之中。而其生無始。…無時非孝也。…生生無終、…」(孝經啓蒙、全一、二七一頁)と説く藤樹とは相容れない。だが蕃山は「孝は太虚の神道」(孝經小解、全三、三頁)と解し、「身」も「立身は全人と成也。全人とは道器合一の身也。」(孝經小解、全三、四頁)として、「孝論・身体論」共に大略師説を継承していると思われる。

山崎闇斎と『日本書紀』神代卷

孫 傳玲

明暦三(一六六七)年の正月七日に、山崎闇斎は藤森神社を参拝した。藤森神社は、京都の南部にあり、『日本書紀』の編纂者である舍人親王をまつる神社である。彼は舍人親王の博識及び『日本書紀』編纂の態度を称えて、「親王強識出群倫、端拝廟前感慨頻、渺遠難知神代卷、心誠求去豈無因」(『垂加文集』(『闇斎全集』第一卷、一三頁)という漢詩を作った。渺遠として知り難き神代卷であるが、心を誠にして求め去らば、その深意を知ることができるだろう、と彼は考えており、ここには神代卷を理解しようとする彼の切実なる心持ちが窺える。